『素問』水熱穴論の研究

遠藤次郎

鍼灸医学における経絡思想の具体的な展開は『霊枢』以後のことであり、『素問』の中には経絡の走行や経穴の記載は稀にしかみられない。しかしながら『素問』の経絡治療に関する数少ない記載の中に、ごく初期の経絡治療の実際を探ることができる。今回述べる頭部および体幹の五行の経脈ならびに行五の取穴法もその一つであり、今日ではまったく顧みられていない。

『素問』水熱穴論に、腰部と頭部における「五行、行五」なる取穴法、ならびに腹部における同様な取穴法がみられる。この「五行、行五」穴とは平行して走る五本の経脈と、各経脈ごとに配された五つのツボ、計二十五穴のことである。腰部におけるこの取穴法は水兪として、頭部における取穴法は熱兪として対立的に述べられている。これらの取穴法は、同一経脈上に陰穴と陽穴を求めるやり方であり、現在一般的な十二経脈にのっとった取穴法とは甚だしく異なる。

この取穴法と同じ立場で経脈が扱われている例を『素問』『霊枢』中に散見する督脈、任脈、衝脈の記載の中に見出した。例えば、『素問』骨空論に述べられている督脈は上下に二分され、腎臓より上を陽経と関連させ、腎臓より下を陰経と関連させている。

次に体幹における五行の経脈と、督、任、衝脈との関連性について検討した。『素問』気府論の「頭上五行」の説や、『霊枢』五音五味篇等にみる任脈と衝脈の記述等により、体幹における経脈の相関関係を次のように推定した。脈気は督脈下部の経脈の海から、腹部の任脈に溢れ出し、さらに督、任脈の正中線から、これに平行する四行線に傍流する。

次に体幹の経脈と四肢の経脈との関係を検討した。水熱穴論には四肢の五行穴と体幹の五行穴とが対比されている例や、熱兪の取穴法として四肢の付け根や体幹の付け根に注目してツボを取る例が存在している。これらのことから、水熱穴論では四肢と体幹とを独立的にみなし、取穴し

ていたことがわかる。

今日では、頭部、背部、腹部を走る四行線は四肢の先端より起こった十二経脈の内に包含されている。しかしながら実際の治療には、背兪穴や募穴等は、四肢に連なる経脈とは関係なく、体幹内部の臓腑の治療に応用されている。この事実は、四肢を中心とした経脈論のみでは全てを包括することができないことを意味している。これを補うためには今回取り上げた督脈と任脈を中心とする体幹における五行の経脈論を再考する必要がある。

（東京理科大学薬学部生薬学教室）

『医心方』に引く『諸病源候論』の条文検討——その取捨選択方針初探

○平馬直樹・小曽戸洋

わが国最古の現存する医書『医心方』は、主として唐以前の中国医書の引用によって構成される。そのかけがえのない資料的価値に比して、独創性に関しては高い評価を得ていない。が、全三〇巻の構成は特徴的な配列を取っており、中国医書の引用に際しても撰者独自の見識に基づいて取捨選択されたと考えられる。本書の編纂方針に多角的に検討を加えその内容自体を吟味することは、資料性とは別の観点からその価値を探る意義を持つ。

『医心方』に引用される医書中、最多の引用回数を占めるのが「病源論」として引かれる『諸病源候論』（以下『病源』）である。『病源』は唐以後の医書の疾病分類法、病態概念に強い影響を与えた病因・病理・病態学全書である。『医心方』にはその総項目数の約三分の一が、五五六回に